

皆様いかがお過ごしでしょうか。今回は千葉県北部にある印旛沼を紹介いたします。

印旛沼は利根川下流右岸側に位置し、印西市、佐倉市、成田市、八千代市、栄町にまたがる湖沼です。流域面積は約487km²あり、湖沼としては千葉県内最大の面積となっています。流域人口が過密で約72.7万人に達し、琵琶湖や霞ヶ浦に次いで日本で3番目の流域人口となっています。

また印旛沼周辺は、江戸時代からウナギが名物となっており、特に成田山参道や沼の周辺にお店が多くあります。私も印旛沼漁協直営の水産センターのレストランへ行ってみました。他にも周辺にはウナギのお店はいくつかありましたが、漁協直営という言葉に惹かれ、こちらのお店に入ってみました。

外観、店内とも道を挟んで向かい側にある新しそうなお店と比べて、なかなか渋くてマニアックな感じでした。店内はレストランというより、食堂のような感じです。メニューは、他にナマズ天ぷらやドジョウ、かわえびの唐揚げなどもありましたが、ここはウナギ一択で、うな重を注文し食べてみました。外側はカリッと中はふわっとしていて、とても美味しくいただきました。

印旛沼方面へお出かけの際は、皆様も食してみたいはいかがでしょうか。

東日本営業本部(部長:高橋 鉄夫)



世界の拠点から
-From the base in the world-



春の風物詩といえば『お花見』。温暖化の影響でしょうか、桜の開花時期が年を追うごとに早まっているように感じられます。今回は札幌市内豊平川河川敷の緑地帯にある『豊平川桜の杜』へ行ってきました。

石狩川治水80周年記念事業の協賛として1990年から植樹が始まり、現在は1000本ほどの規模となったそうです。

札幌の数あるお花見スポットの中では、知る人ぞ知るといった穴場的なスポットですので、余り混雑することも無く愛犬の散歩がてらゆっくり桜の花見を堪能できました。



札幌営業所(所長:清水 壮次郎)

3月末、名古屋では桜の季節。昨年は近所の公園に咲いている花を眺めていただけでしたが、今年は名古屋の名所に行ってみようと思い、山崎川の桜を見に行きました。ここは『日本さくら名所100選』に認定されている有名な場所です。名古屋市瑞穂区にあり、石川橋から落合橋までの約2.5kmに渡り、兩岸の桜並木が楽しめます。距離も長く続いている為、場所によっては観光客が少なく、ゆっくり眺められるところがあります。

今回、私が行った所は山崎川の山下橋。パロマ瑞穂ラグビー場の近くです。残念ながら桜は満開ではありませんでしたが、休日の花見にはこの日しかなく、少ないとはいえ、多くの人が散歩がてら花見。外国人も多く見られ、桜以外の観光が少ない場所でしたが、さくら名所100選の情報で来たと思われそうです。気候も良く、ウォーキングしながらの花見も健康的で良いですね。

中日本営業所(部長:藤谷 弘行)

先日、宮崎を訪れた際に、宮崎空港にて印象的な展示に出会いました。

空港内では『みやざきの神楽』をテーマにした展示が行われており、神楽装束や神楽面の迫力ある姿が目を引きました。日本神話の世界観を感じさせる演出で、到着直後から地域文化の魅力に触れることができました。

また、周囲には宮崎の自然を切り取った写真作品が多数展示されており、雲海に包まれる山々や幻想的な星空など、思わず足を止めて見入ってしまう内容でした。空港という場所でありながら、まるで旅のプロローグのような空間でした。

宮崎を訪れる機会があれば、ぜひ空港内の展示にも注目してみてくださいと言いたいところですが、すでに開催期間を過ぎてしまっていますので、高千穂など他にも魅力的な地域がたくさんある宮崎県へ是非お越しいただけたらと思います。

西日本営業所(部長:木下 敦裕)

週末になると家内と一番下の娘(名前:ギナ)と一緒に外食をしに行きます。通常インドネシア料理か日本料理を食べますが、たまにベトナム料理も食べます。娘は24歳で、友達と一緒に何度か日本に旅行をしたことがあります。そのためにインドネシア料理よりも日本料理のほうが大好きです。彼女にとって刺身、寿司などが一番のお気に入りです。自分も妻も、最近、健康上の理由でご飯類などの量をできる限り少なくして、野菜などを多くとるようにしています。

日本食のレストランに行く時に、ご飯類の代わりにしらすラーメン(しらす料理はカロリーが低いと言われている)を選択しています。後はサラダとししゃもなどの魚で、これは私と妻のお気に入り料理です。さらに、インドネシアの伝統料理を作っている『Remboelan』というレストランは最近人気があって、多くの人が列に並んでいます。インドネシア料理の定番メニューはご飯類でチャーハン、日本にはないインドネシア風炊き込みご飯は通常のお米はもちろん、しらす米でも注文でき、通常の米料理と味が全く変わらないくらい美味しく食べられます。

もし、どなたかジャカルタに遊びに来るとき私に声をかけていただければ、時間を作ってインドネシア料理レストラン『Remboelan』にご案内します。しらす米のインドネシア風炊き込みご飯を食べたら、一生ものの良い経験を味わえること間違いのないと思います。

KJI(インドネシア)(工場長:S.Akhyar)

～未来が一気に～

キレキレダンスやバク転、バク宙、おじさんにはとてもムリな動きもお手の物。最近の中国のロボット産業の急速な発展には驚きの連続です。かつては工場のラインで黙々と作業する産業用ロボットが中心でしたが、今では人型ロボットがまるで体操選手のような動きを披露するまでになりました。先日走ったマラソン大会では、コース上でロボット達のダンス応援パフォーマンスに遭遇しました。ヒップホップの音楽に合わせた見事なダンスにはランナー達からも大歓声が沸き起こりました。

中国では人型ロボットのメーカーだけでも140を超えと言われ、まるで未来が一気に押し寄せてきたかのような勢いです。背景には、中国政府の『製造強国』戦略も影響しているようです。その結果、大学やスタートアップから次々と新しい技術が生まれ、ロボットの用途は物流、介護、教育、エンターテインメントへと広がっています。一部ではすでにメーカー乱立による淘汰も始まっていますが、新産業の発展は裾野が広がらなければ山は高くないという面もあることを実感させられます。単なる技術の誇示ではなく、生活や産業に本当に役立つ存在へと進化できるかどうか。AIやロボットをめぐる競争、発展はまだまだ熱くなりそうです。

KHE(中国・蘇州)(総経理:山本 博史)

～ゲームの怖さ～

私はもともと、あまり携帯ゲームをするタイプではありません。それに運動も、体にいいと分かっているけど、毎日続けるのはなかなか難しいですよ。

そんな私が最近ハマっているのが、NintendoのPikmin Bloomです。歩きながら花を咲かせていくシンプルなゲームなのですが、これが思った以上に楽しくて、気づけば毎日歩くこと自体が楽しみになっています。今では最低でも5km、多い日は8kmほど歩くようになりました。健康のためだけではなかなか続かなかったことが、ゲームがきっかけだとこんなに自然に続くのかと、自分でもびっくりしています。ゲームの力、

ちょっと恐るべしです(笑)

最近はその感じで、毎日歩くことにすっかりハマっています。健康のためにも、この良い流れをしばらく続けていけたらと思っています。

実は、KCSのメンバーや家族、友人たちも誘ってみんなで一緒に歩いたり、お花をまいたりして楽しんでいます。国をまたいで仲間になれるのも、このゲームの楽しいところですよ。もしかすると、他の国にしかないPikminなどもいるのかな……と、ちょっと気になっています(笑)

もしご興味があれば、ぜひ皆さんもお花を咲かせながら一緒に歩いてみませんか。

KCS(アメリカ)(GM:Ayano Donnelly)

人々は日々の生活の中で、効率を高めるために常に改善策を探しています。時に、多くの制約に縛られていると、なかなか改善点が思い浮かばないこともあります。しかし、既成概念にとらわれずに考えることができれば、多くの良い選択肢が見つかるかもしれません。

以前、マレーシアのマラッカという小さな街を訪れたことがあります。クアラルンプールから約145km離れた場所です。約束の時間より早く着いたので、小さなお店で手軽な飲み物を注文しました。店内には小さなテーブルがいくつかあり、壁にティッシュペーパーの袋が吊るされているのが目に入りました(テーブルの上に置くのではなく)。袋の底に開口部があり、小さなテーブルのスペースを有効活用していました。小さくてシンプルなアイデアですが、(テーブルが狭いという)問題を非常に効果的に解決していました。

KIO(シンガポール)(E.Wong)

私は人口約6,000人の小さな村に住んでいます。ここはとても穏やかで落ち着ける場所です。しかし、年に一度、大きなダンスフェスティバルが開催され、合計5万人の来場者が週末にかけて踊り明かします。私たちがこの村に引っ越してきた頃、このフェスティバルは軍用テント1張ほどの規模で、飲み物はビールケースから提供され、綱引き大会が行われる程度のものでした。2009年以降、音楽中心のものへと方向転換し、大成功を収めました。現在では10のエリア、300組以上のアーティスト、キャンプ場を含む10ヘクタールのフェスティバル会場となっています。

このフェスティバルは主に地域のボランティアによって支えられており、私たちの村や近隣の村から多くの人々が設営、撤去、そしてその間のあらゆる作業にボランティアとして参加しています。例年通り、私もボランティアとして参加し、バーで飲み物の提供を手伝いました。地元住民の多くはその音楽スタイルを好みませんが、このようなフェスティバルを小さな村で開催できることをとても誇りに思っています。『仕事』をしていると、たくさんの知り合いと出会い、ちょっとした会話を交わして思い出を作ることができます。

一日が終わってバーが片付くと、ボランティア全員が『アフターパーティー』に招待されます。ここでは、無料の飲み物を楽しみながら夜遅くまで地元の仲間たちともう少しだけおしゃべりすることができます。毎年大成功で楽しいイベントなので、来年もぜひ参加したいと思います。

KIO(オランダ)(Ferri Visser)